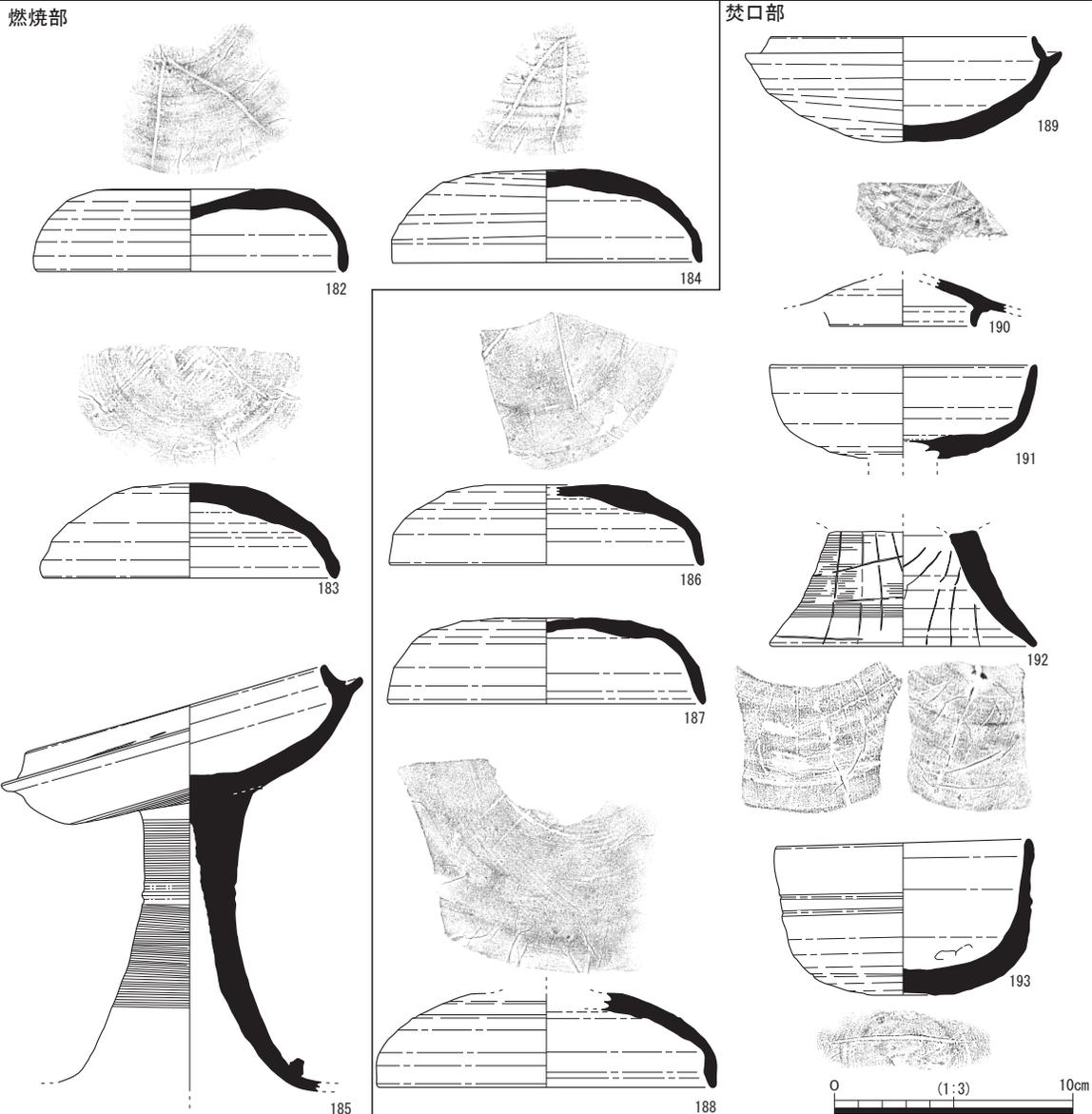
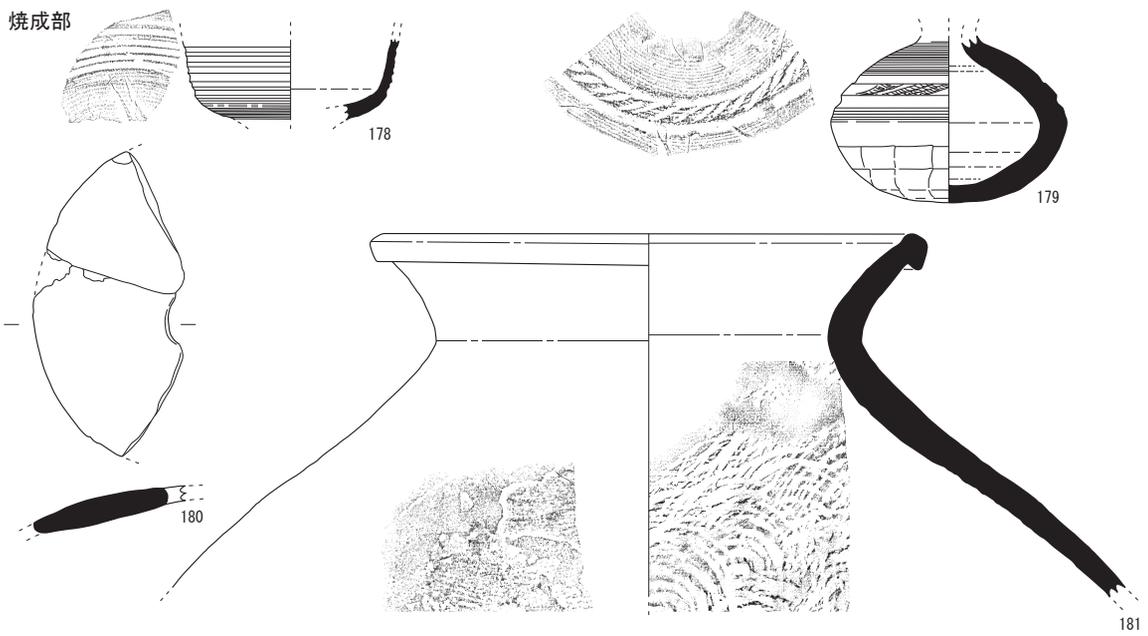
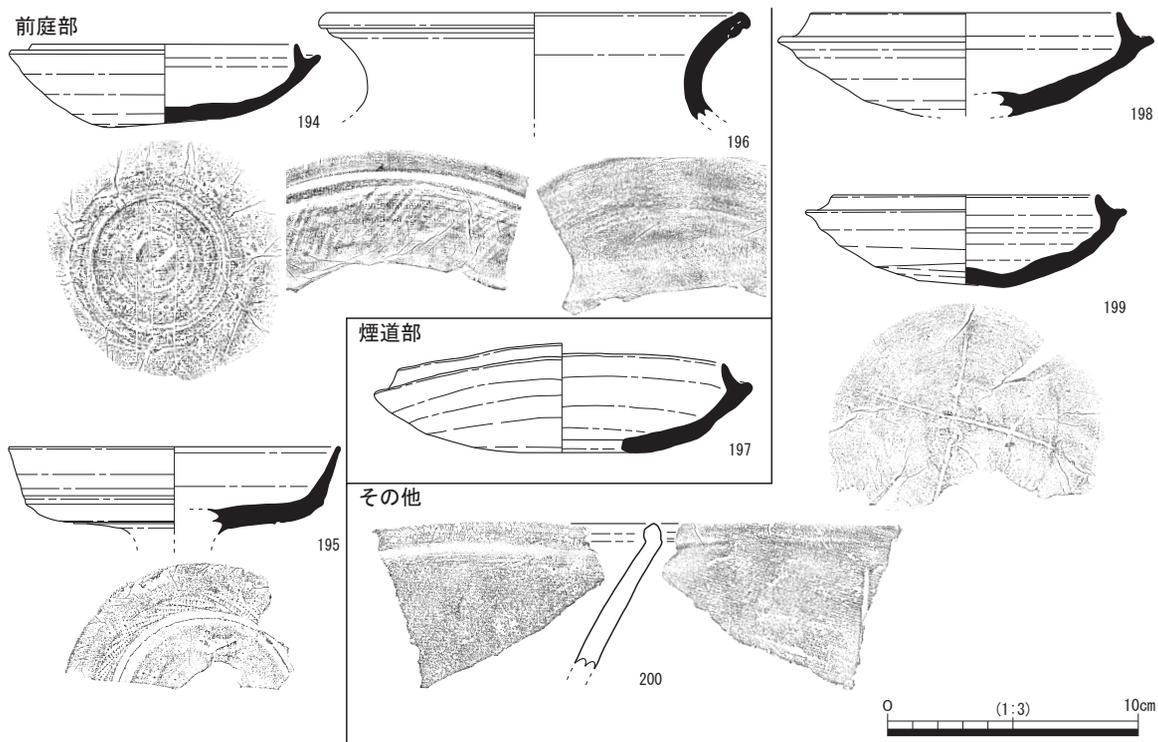


第 27 図 東浦窯跡群 3 号窯跡実測図 (1/60)



第 28 图 3 号窯跡出土遺物実測图① (1/3)



第 29 図 3号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

187 は内面に指頭痕が残る。186・188 は外面にヘラ記号を有する。189 は杯 H 身で、底部は回転ヘラケズリで内面に指頭痕が残る。190 はカエリを有する小型の蓋で、壺蓋と考える。天井部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有する。191 は無蓋高杯の杯部である。192 は高杯脚部の破片で、外面はカキメ、内外面に線刻もしくはヘラ記号を有する。193 は椀で上位に 2 条の沈線が巡り、底部にヘラ記号を有する。

【前庭部 (第 29 図)】

須恵器 (194～196) 194 は杯 H 身で、底部は回転ヘラケズリ、内面に指頭痕が残る。195 は無蓋高杯の杯部で、外面に刺突文を施す。196 は甕の口縁部片で、外面に平行タタキの痕跡が残る。

【煙道部 (第 29 図)】

須恵器 (197) 杯 H 身で、底部は回転ヘラケズリである。底部中央に焼成前穿孔がある。

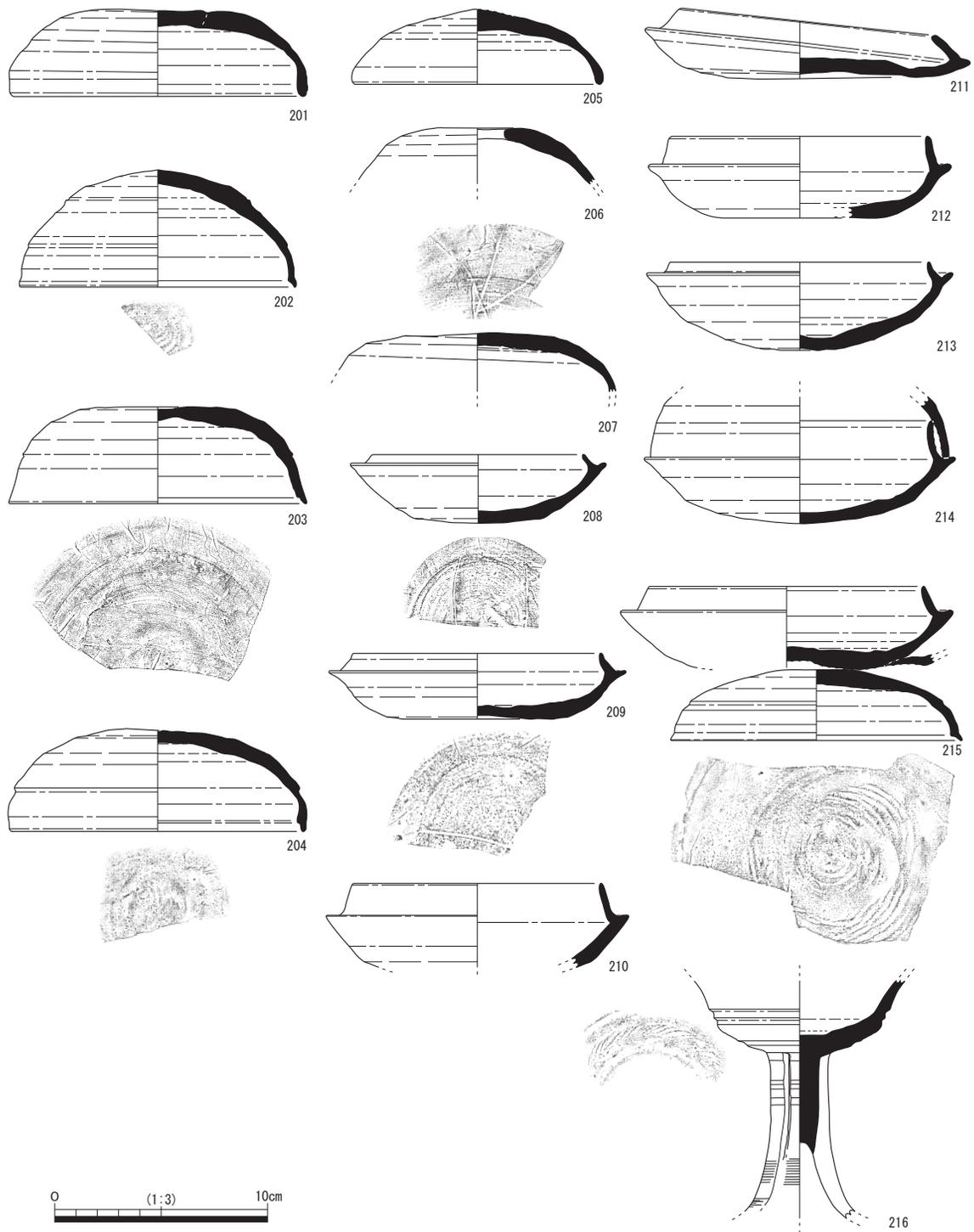
【その他 (第 29 図)】

須恵器 (198・199) 198・199 は杯 H 身である。いずれも底部は回転ヘラケズリで、199 は底部内面に指頭痕が残る。

縄文土器 (200) 浅鉢の破片で、口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面ともにナデである。

(3) 小結

3号窯は全長 9.5 m の地下式窖窯である。平面寸胴形で、多孔式煙道窯の可能性はある。燃焼部と焼成部の境付近に天井を支えたと考えられる支柱を確認した。また、当初作業面より浮いた状態で未焼成の甕などが出土した。作業時期は出土遺物より IV A 期に位置づけられる。

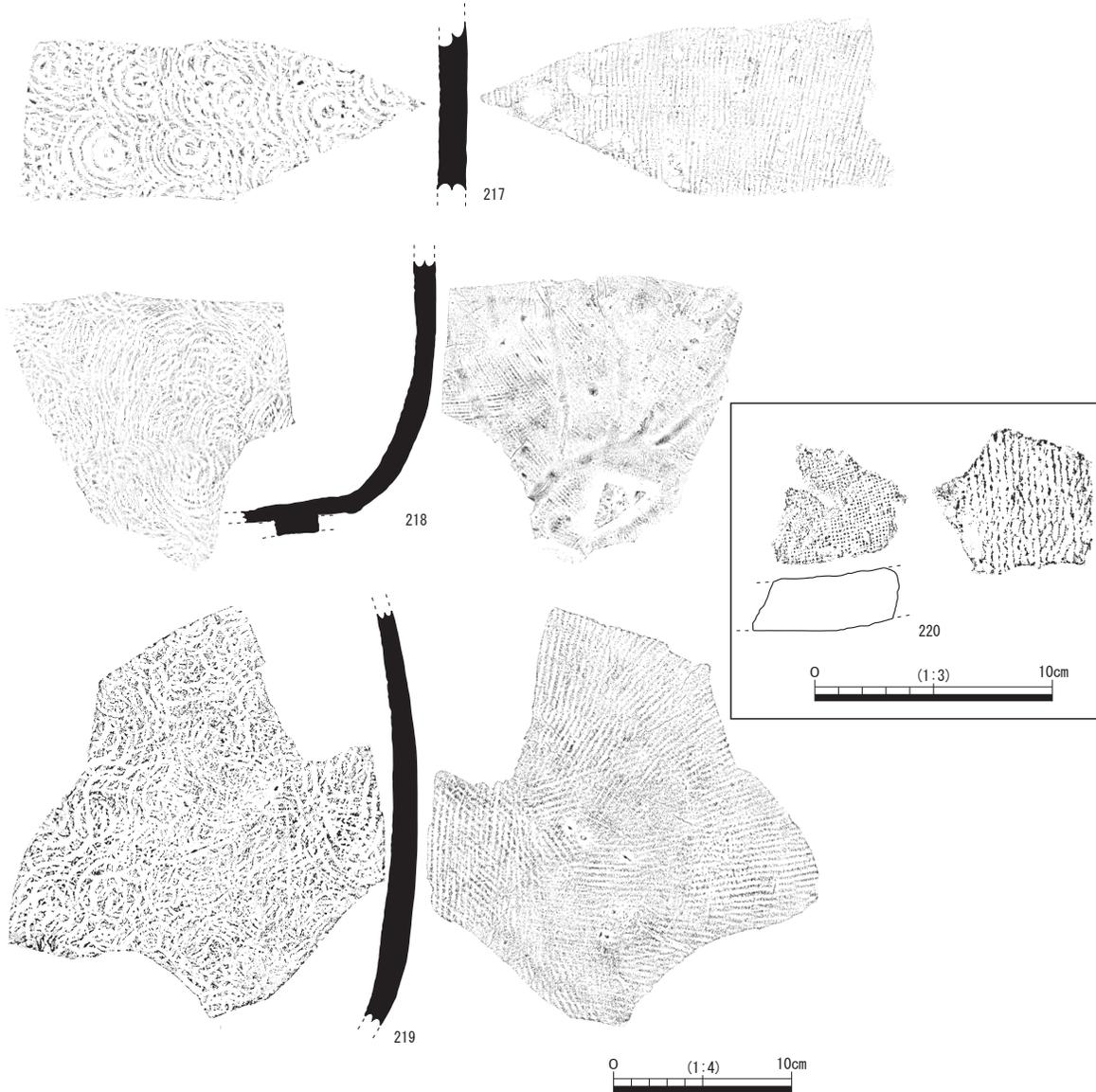


第30図 東浦窯跡群出土地点不明遺物実測図① (1/3)

5. 出土地点不明遺物

(1) 出土遺物 (第30・31図)

須恵器 (201～219) 201～207は杯H蓋である。201・207の天井部はヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。202～204は口縁部と天井部の境および口縁端部に段を有し、内面に当具痕が残る。207は外面にヘラ記号を有する。208～215は杯H身で、口径が小さく口縁部の立ち上がりが低いもの(208・209)と、口径が大きく立ち上がりが高いもの(210～215)がある。前者は外面にへ



第31図 東浦窯跡群出土地点不明遺物実測図② (1/3・1/4)

ラ記号を有し、後者は底部内面に当具痕が残る。いずれも底部は回転ヘラケズリである。215は杯H蓋・身の溶着資料で、身の底部と蓋の天井部が重なる。身は口径12.8cmで、内面に当具痕が残る。蓋は口径13.6cmで、口縁部と天井部の境に沈線が巡り、口縁端部は面を成す。216は無蓋高杯である。杯部は外反して開き、下位に沈線が巡り、連続刺突文を施す。脚部は透かしを有し、上半部は未貫通、下半部は貫通する。217～219は甕の破片で、外面に擬格子タタキ、内面に同心円当具痕が残る。

瓦(220) 平瓦の破片で、外面に縄目タタキ、内面に布目痕が残る。

(2) 小結

出土地点不明遺物の中には、1～3号窯と同時期の須恵器のほか、ⅢB期の須恵器が複数ある。溶着資料もあることから、当該期の操業も想定できる。

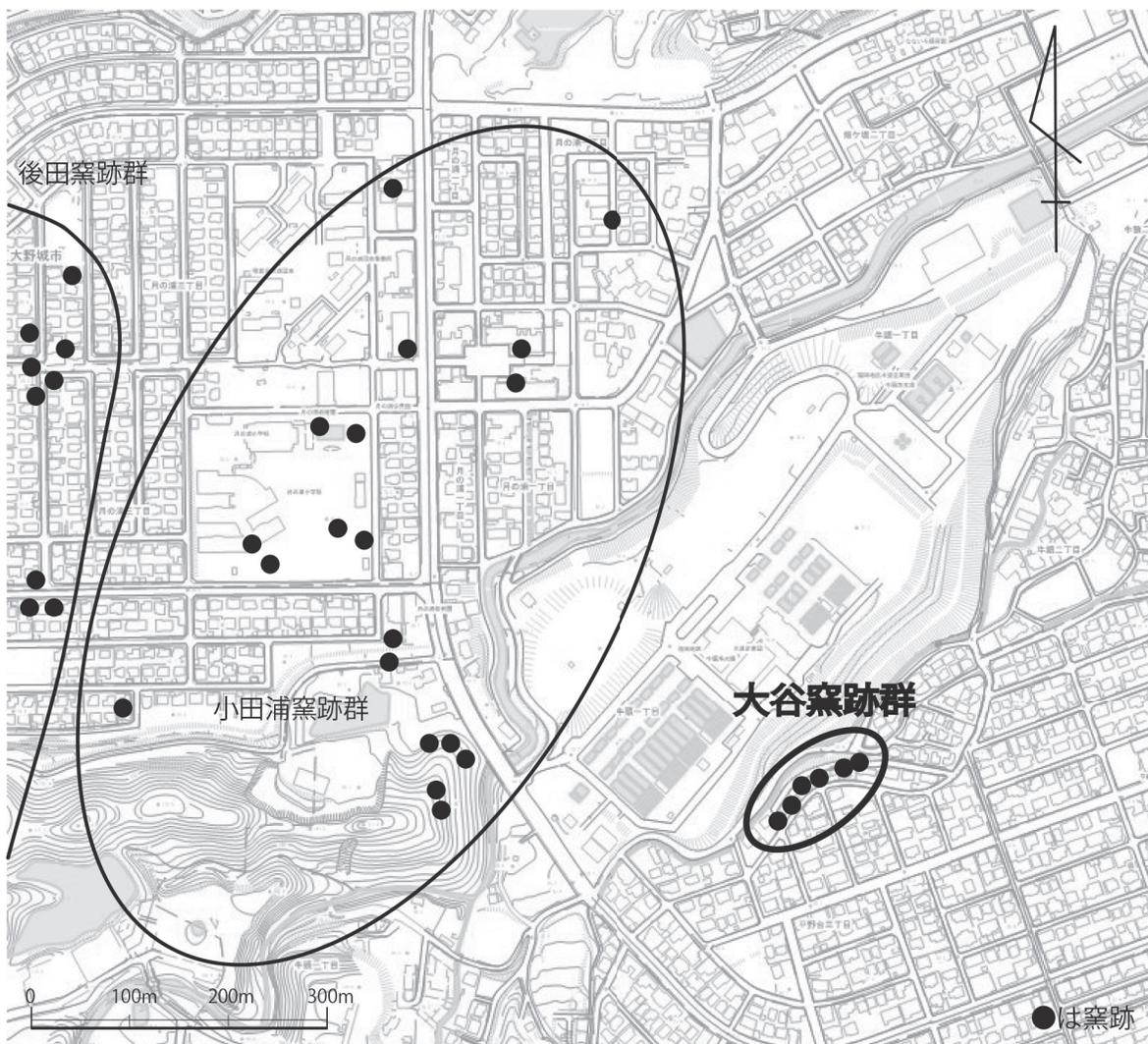
V. 大谷窯跡群

1. 調査の概要

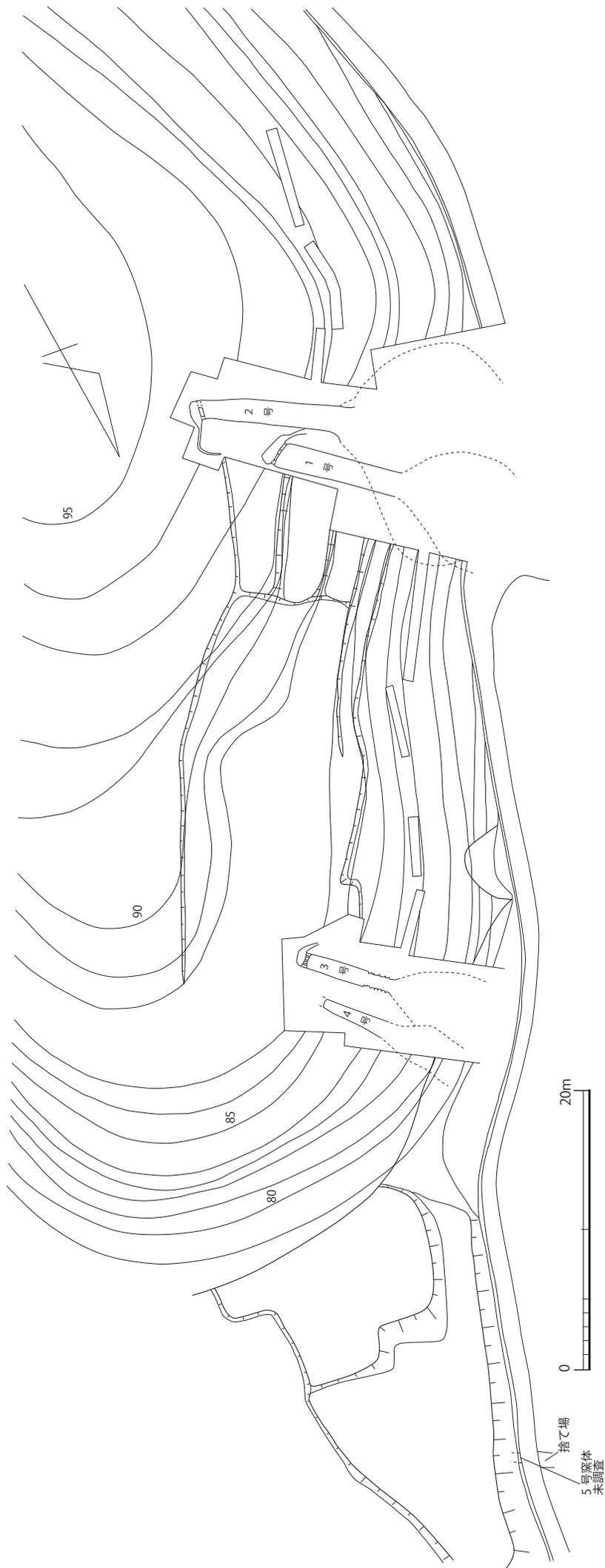
大谷窯跡群は大野城市南部（現・大野城市平野台2丁目）に所在する。牛頸山北麓の丘陵地に位置し、窯跡は北側にのびる丘陵の西側斜面に構築される。

国士舘大学による昭和43年の調査の際に6基の窯跡を確認し、南から0号窯、1号窯、2号窯、3号窯、4号窯、5号窯とされ、うち4基（1～4号窯）について発掘調査が行われた。1・2号と3・4号が近接し、1・2号と3・4号は約30m離れている。窯跡配置図には4号が3号より後出する表現になっている。1・2号の先後関係は明確ではないが、2号の灰原が1号窯体を覆う表現になっており、1号窯の後に2号窯が操業された可能性がある。

なお、それぞれの窯に帰属する遺物は各窯の項目で報告するほか、出土地点が不明なものも多く、それらは一括して「出土地点不明遺物」として報告する。このほか、「0～5トレンチ」や「3区」として取り上げている遺物があるが、それぞれがどの地点を示すのかは不明である。



第32図 大谷窯跡群調査地点位置図 (1/7,500)



第 33 図 大谷窯跡群遺構配置図 (1/400)

2.1 号窯跡

(1) 窯の構造 (第 34・35 図、図版 21～25)

地下式の窖窯である。灰原から煙道部まで確認し、水平長 15 m を検出した。全長 8.9 m で、窯尻部・焚口部の絞り込みはほとんどなく、平面寸胴形を呈する。煙道部には天井部が遺存し、3 つの排煙口からなる多孔式煙道窯である。窯の主軸方位は S-48°-E である。調査の結果、4 次にあたる操業面を確認した。

【焚口部・燃焼部】 燃焼部の横断土層より、4 次にあたる操業が想定できる。当初操業面の幅は 2.05 m であるが、2 次操業面以降順次拡幅しており、最終操業面の幅は 2.8 m となる。平面図には焼成部の床面に直径 1.0 m ほどの円形土坑が表現されているが、断面図ではこれよりさらに焚口部側で 1.8 m ほどの落ち込みがあり、舟底状ピットと推測される。床面の傾斜角度はおおむね水平である。

遺物は完形品の蓋杯類が複数出土したほか、比較的多くの瓦が出土した。

【焼成部】 水平長約 5.5 m、幅 2.0 m である。床面の傾斜角度は焚口部側から中央部までおおむね 25 度で、焼き台と考えられる須恵器の甕片が散在する。中央から煙道部側にかけては 40 度前後となり、この部分では約 1.8 m の範囲で床面が階段状となる。階段は 5 段あり、それぞれの奥行きは 0.2～0.3 m である。また、燃焼部側床面の壁面側には直径 0.6～0.7 m ほどの円形ピットがある。

焼成前穿孔がある須恵器蓋杯や焼き台と考えられる甕片などが出土した。

【煙道部】 3 つの排煙口が横一列に並ぶ多孔式煙道で、天井部が遺存する。長さは 1 m 前後で、溝に接続する。各排煙口の直径は 0.5～0.6 m 程度である。地山を掘り抜いたものか、粘土などで構築したものかは不明である。

須恵器杯 H 蓋・身のほか、高杯が出土した。

【溝】 煙道部の右側に、溝が接続する。窯の右側を焚口部方向に 2.4 m ほどのびた後に終息する。上端の幅 0.4 m、下端の幅 0.2 m で、断面逆台形を呈する。

遺物は蓋杯類が少量出土した。

【付帯施設】 焚口部・燃焼部の両側に掘り込みが認められる。右側は長さ 3.0 m、幅 2.5 m ほどの掘り込みで、床面に長さ 2.0 m、幅 1.0 m ほどのピットがある。左側は全体が不明であるが、幅 3.0 m 以上の掘り込みである。

【灰原】 詳細は不明であるが、全体図の中で長さ 7 m、幅 6 m の範囲で図示されており、上面は 2 号窯跡の灰原に被覆されているようである。

遺物は須恵器蓋杯・高杯・平瓶・すり鉢などが出土した。

(2) 出土遺物

【燃焼部 (第 36～40 図)】

須恵器 (221～241) 221～231 は杯 H 蓋で、口径は 11～12 cm である。口縁部は短く直立するものが多く、天井部はおおむね平坦である。226・227・230 の外面は回転ナデによる凹凸が顕著である。221・227・228 は天井部はヘラ切り、他は回転ヘラケズリを施す。221 以外は外面にヘラ記号を有する。232 は杯 G 蓋で、器体が大きく歪む。天井部は手持ちヘラケズリで、外面にヘラ記号

を有する。233～240は杯H身で、口径は10cm前後である。口縁部の立ち上がりは短く内傾するものが多く、240の立ち上がりは非常に低い。底部は平底気味である。233～236・240は外面にヘラ記号を有する。いずれも底部は回転ヘラケズリである。239は体部、240は底部に焼成前穿孔を施す。241は椀である。内外面は回転ナデで、体部下半は工具ナデを施す。

瓦 (242～255) 平瓦である。いずれも破片であるが、残存状況の良好な242は残存幅16.6cm、残存長20.4cm、243は残存幅14.6cm、残存長16.2cm、247は残存幅12.6cm、残存長26.9cm、252は残存幅12.9cm、残存長24.3cmである。厚さは平均1.5cm前後で、厚いもので2.4cm、薄いもので1cm前後である。側縁部・広端部・狭端部を面取りし、側縁部は凹面もしくは凸面側まで面取りするものが多い。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残り、糸切り痕が残るもの(244・247・250・253)、模骨の紐の痕跡が残るもの(243・244・246～248・251～253)がある。凸面はナデ・工具ナデやケズリ状の調整で、243・245・246・247・248・249・250・251・253・254・255などは平行タタキの痕跡が残る。焼成は硬質で灰色を呈するものや軟質で黄灰色を呈するものがある。胎土には1～3mm程度の白色砂粒を含む。249は二次焼成を受けることから、焼き台として使用したと考えられる。255は凹面に線刻がある。

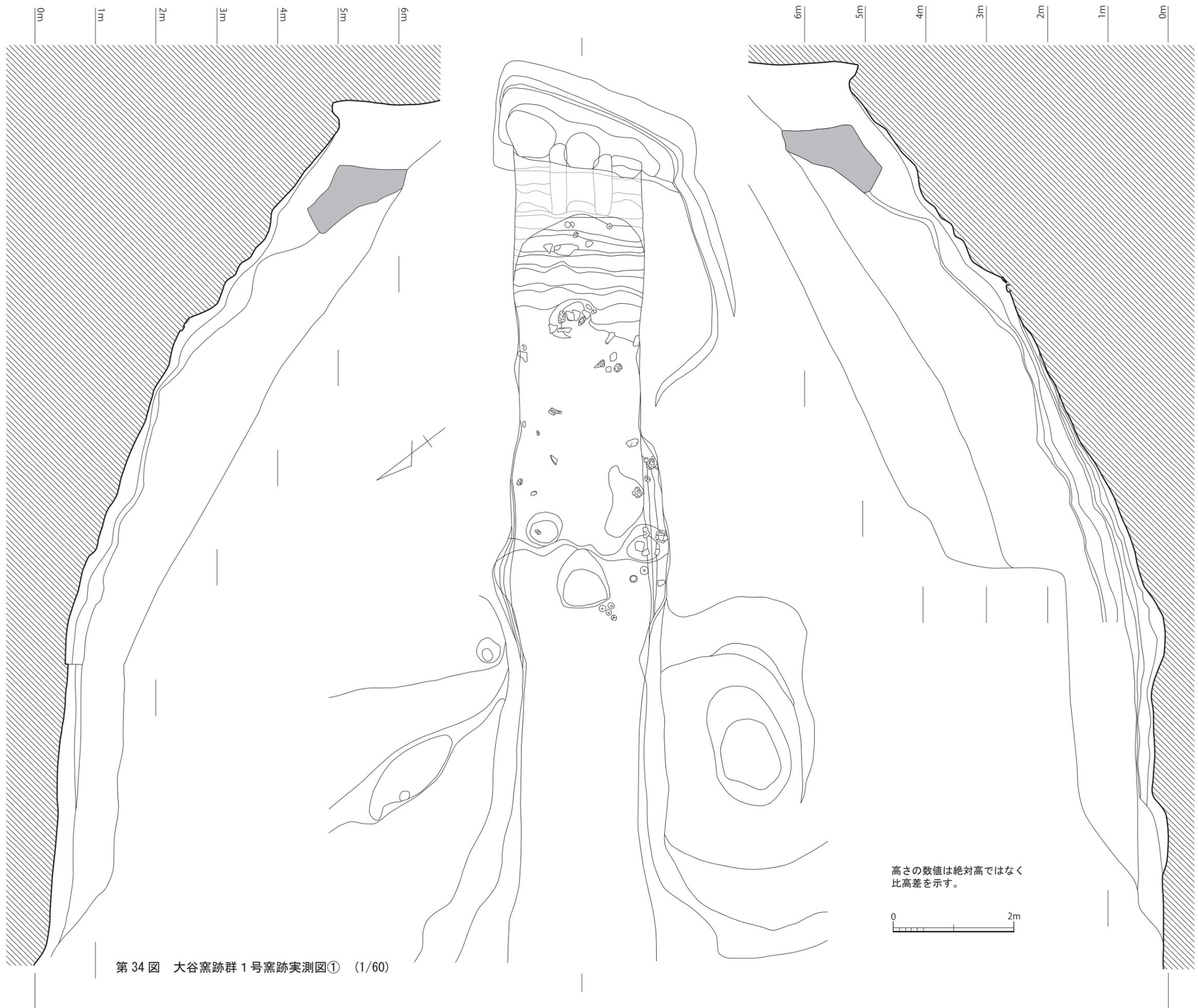
【焚口部 (第41図)】

須恵器 (256～262) 256～258は杯H蓋で、口径12cm前後である。全て口縁部は短く直立し、天井部は丸みを帯びる。257は天井部を回転ヘラケズリ、他は手持ちヘラケズリである。いずれも外面にヘラ記号を有する。258は歪みが顕著である。259は杯H身で、底部にヘラ記号を有する。降灰により底部の調整は不明である。口縁部に蓋が溶着する。260は甕の口頸部である。261は椀の破片で、底部は回転ヘラケズリ、外面に沈線が巡る。262は甕で、体部は外面に平行タタキ、内面には同心円当具痕が残る。

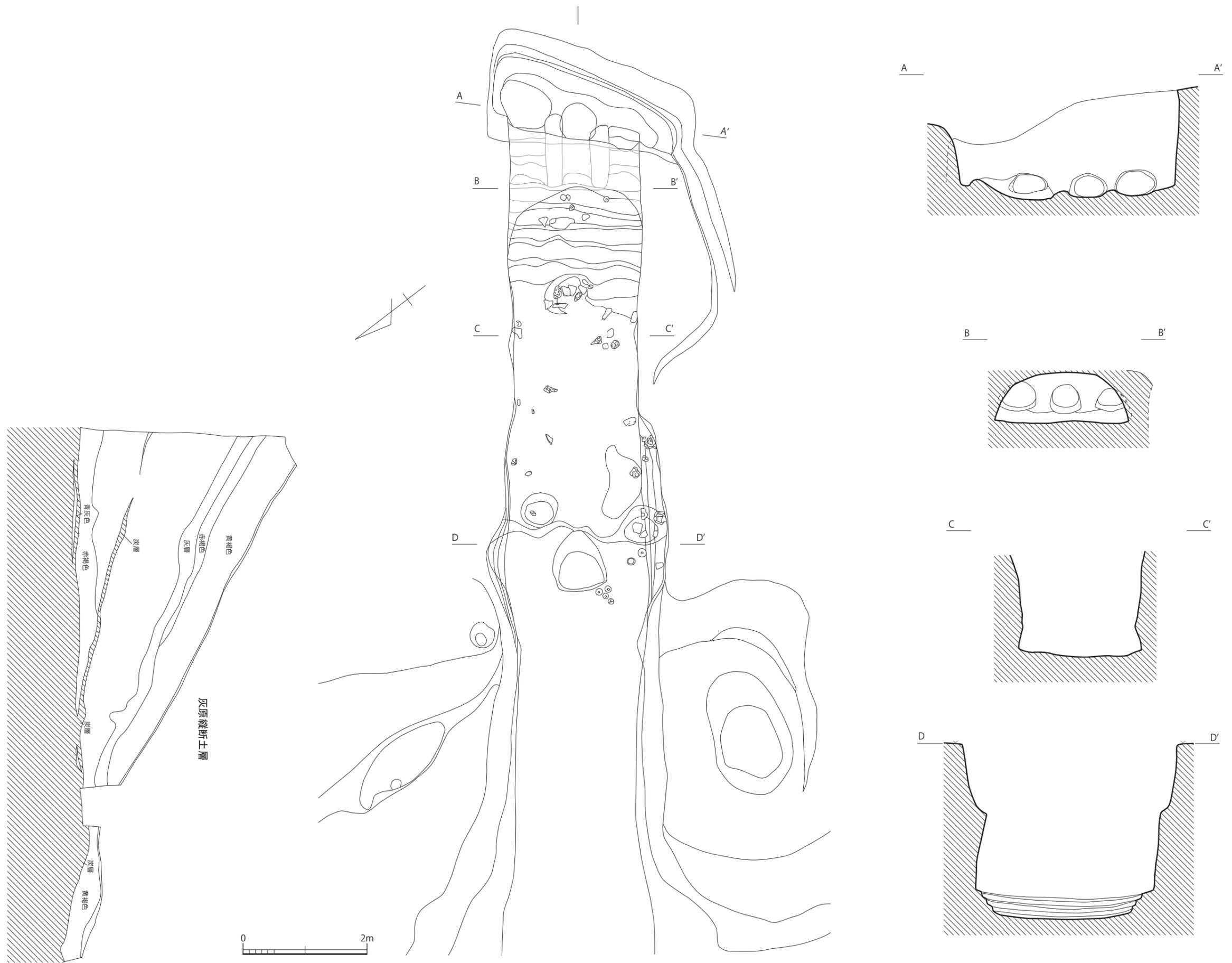
【焼成部 (第42～44図)】

須恵器 (263～275) 263・264は杯H蓋で、263は口縁部が直立気味に立ち上がり、264は天井部が丸みを帯びる。両者とも天井部はヘラ切りで、264は外面に竹管文を施す。265は杯G蓋で、天井部に回転ヘラケズリを施し、外面にヘラ記号を有する。266は杯B蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。267・268は杯H身である。267は降灰のため調整は不明瞭である。268は底部回転ヘラケズリで、歪みが顕著である。269は杯B身で、高台端部は外側へ張り出す。270は高杯杯部で、外面の一部にカキメを施す。271・272は高杯脚部である。271は上半部にカキメを施し、他は回転ナデ、272の内外面は回転ナデである。いずれも脚部内面にヘラ記号を有する。273は椀で、外面の底部付近は手持ちヘラケズリ、他はカキメを施す。274はすり鉢(陶臼)で、内外面ともに回転ナデ、底部は工具ナデを施す。275はツマミの破片で蓋であろう。杯B蓋のツマミと比べ大型であり、壺などに伴う可能性がある。

瓦 (286～295) 286～293は平瓦である。いずれも破片であるが、残存状況が良好な293は残存幅11.6cm、残存長16.4cmである。厚さは平均1.5cmほどで、厚いもので2.2cm、薄いもので1.1cmである。側縁部・広端部・狭端部を面取りする。側縁部の面取りは2つの単位があるものや、凹面

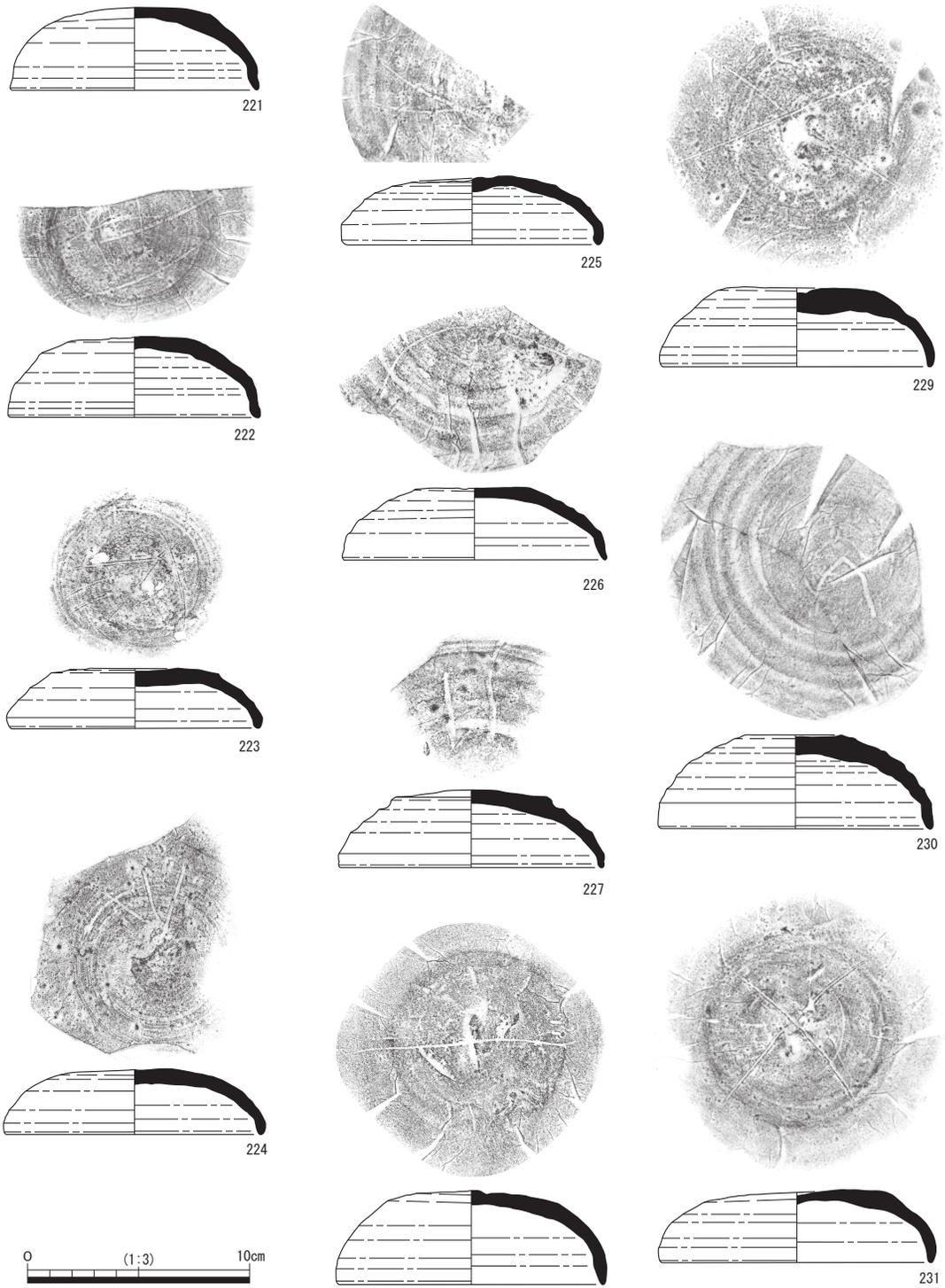


第 34 図 大谷窯跡群 1号窯跡実測図① (1/60)



第 35 图 大谷窯跡群 1 号窯跡実測图② (1/60)

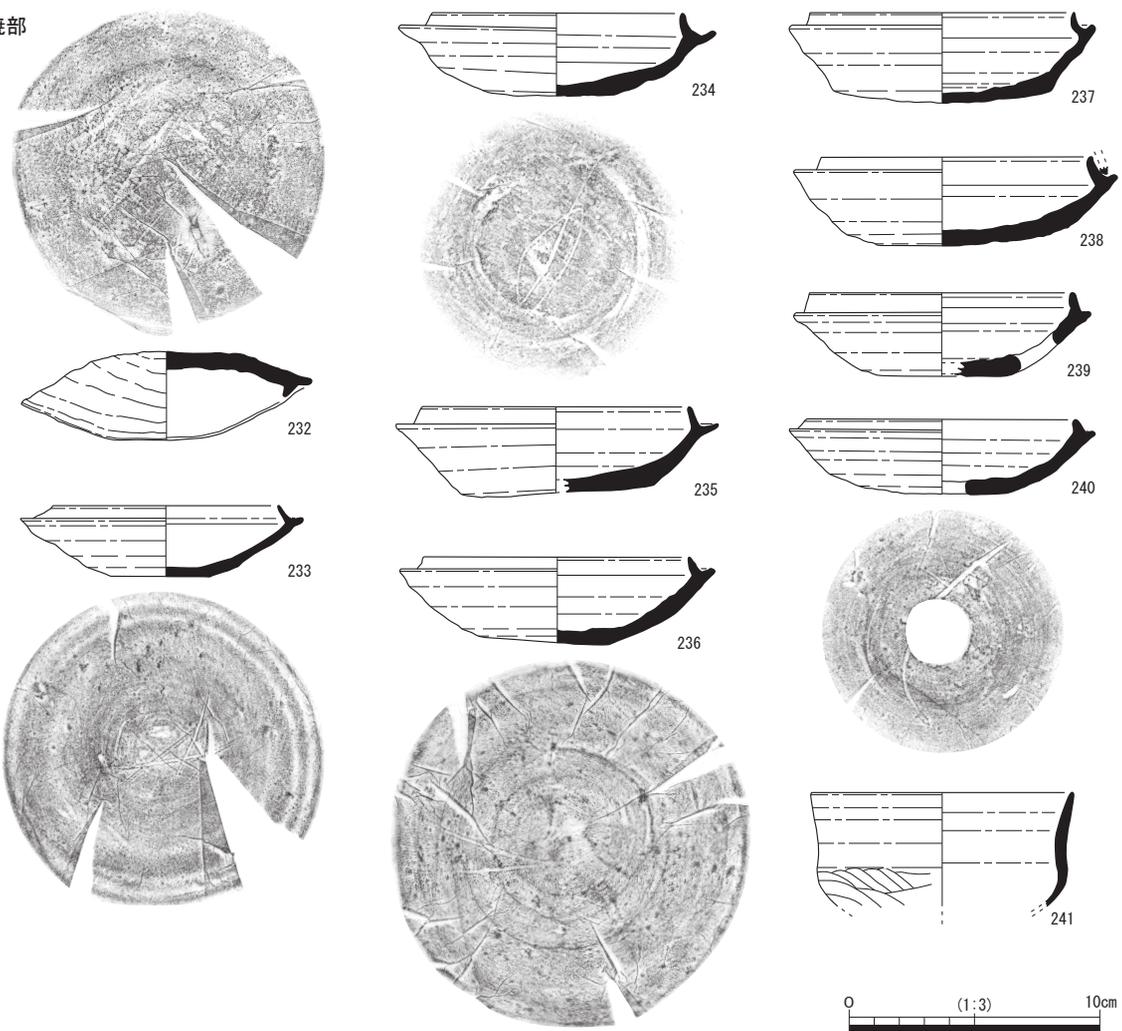
燃烧部



第36図 1号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

側まで調整するものもある。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残り、糸切り痕が残るもの(289・292)や、模骨の紐の痕跡が残るもの(286～288・290～293)がある。凸面はナデ・工具ナデやケズリ状の調整で、286～289・291・293などは平行タタキの痕跡が残る。焼成は軟質のものが多く、黄灰色から赤灰色を呈する。胎土には1～5mm程度の白色砂粒を含む。294は丸瓦で、残存幅12.4cm、残存長19.0cm、厚さ1.6cmである。凹面に模骨痕・布目痕・模骨の紐の痕跡が残る。側縁部は丁寧に面取りし、一部凹面側まで及ぶ。凸面はタタキ後ナデである。焼成はやや軟質で褐灰色を呈し、胎

焼部



第 37 図 1 号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

土中に 1～3mm の白色砂粒を含む。295 は側縁部が「く」字状に屈曲する部分があり、通常の平瓦とは異なることから道具瓦とした。ほぼ平坦であるが、わずかに湾曲する。残存幅 16.6cm、残存長 17.9cm、厚さ 1.7cm である。凹面は模骨痕・布目痕、凸面は平行タタキをナゲ消す。側縁部は面取りし、一部凹面側まで及ぶ。屈曲部分は削り出しによるものである。

【煙道部 (第 42 図)】

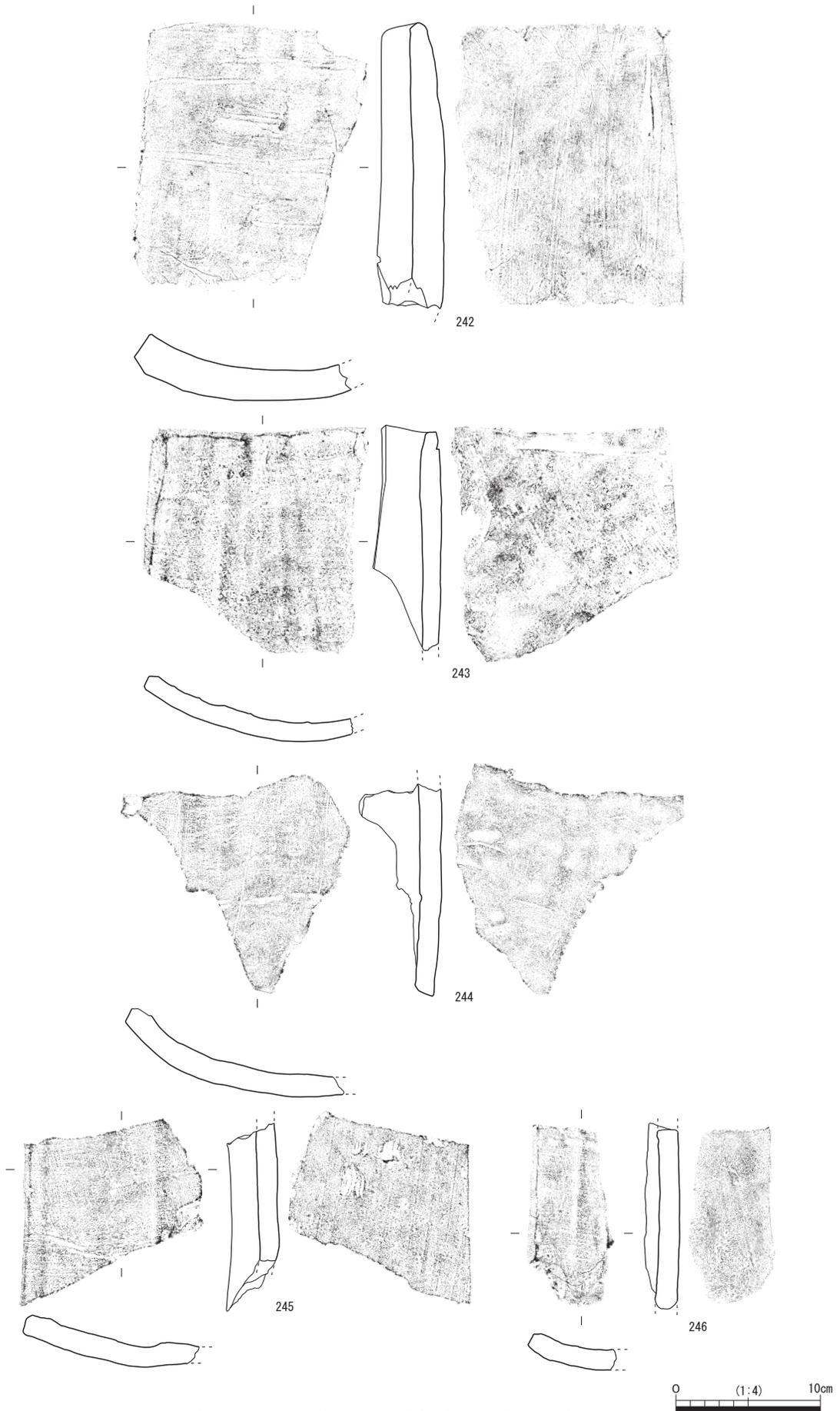
須恵器 (276～285) 276～280 は杯 H 蓋で、276・277 は口径 10cm、他は 12cm 前後である。いずれも口縁部は短く直立気味に立ち上がる。天井部は 278 がやや平坦、他は丸みを帯びる。276 以外は外面にヘラ記号を有する。天井部は 278 がヘラ切り、他は回転ヘラケズリである。276 は天井部を穿孔し、280 は外面に別個体の杯 H 身が付着する。281～284 は杯 H 身で、口径 10～11cm である。口縁部は全て短く内傾し、底部は 284 が平底気味、他は丸みを帯びる。283・284 は外面にヘラ記号を有する。281・282 は降灰のため調整は不明である。283 は底部をヘラ切り、284 は回転ヘラケズリである。285 は高杯脚部である。外面中位に沈線が巡り、他は回転ナゲである。

【溝 (第 45 図)】

須恵器 (296・297) 296 は杯 H 蓋で、口縁部は短く立ち上がり、天井部は平坦である。天井部は

燃烧部

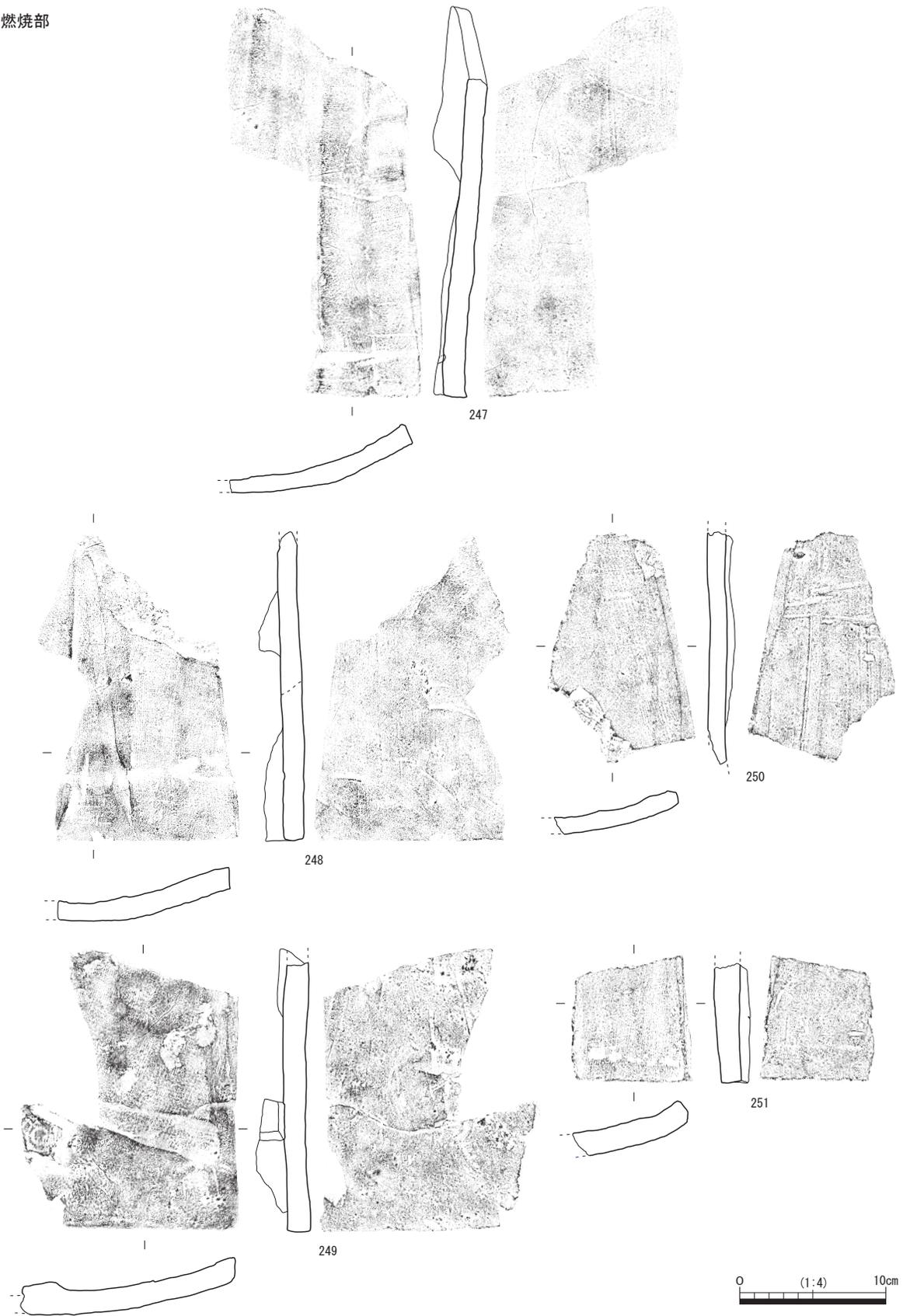
大谷窯跡群



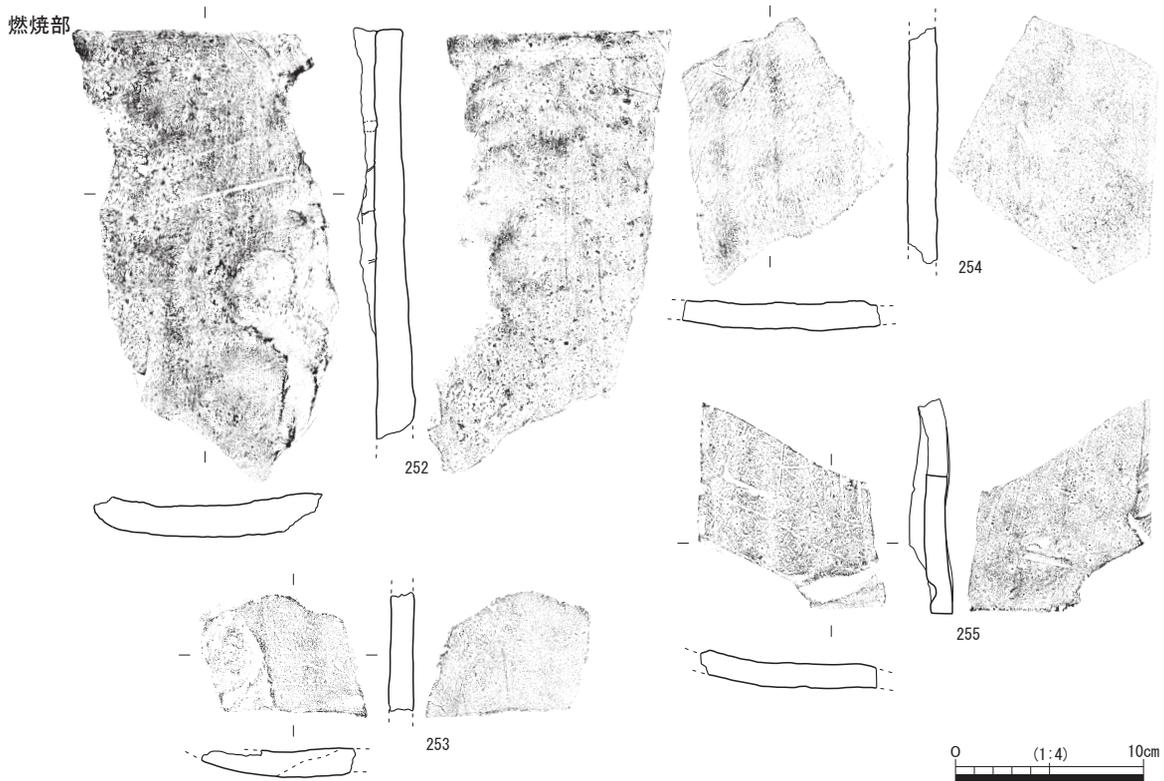
第 38 图 1 号窯跡出土遺物実測図③ (1/4)

燃烧部

大谷窯跡群



第 39 图 1 号窯跡出土遺物実測图④ (1/4)



第40図 1号窯跡出土遺物実測図⑤ (1/4)

ヘラ切りで、外面にヘラ記号を有する。297は杯H身で、歪みが顕著である。口縁部の立ち上がりはやや高い。底部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有する。

【灰原 (第45図)】

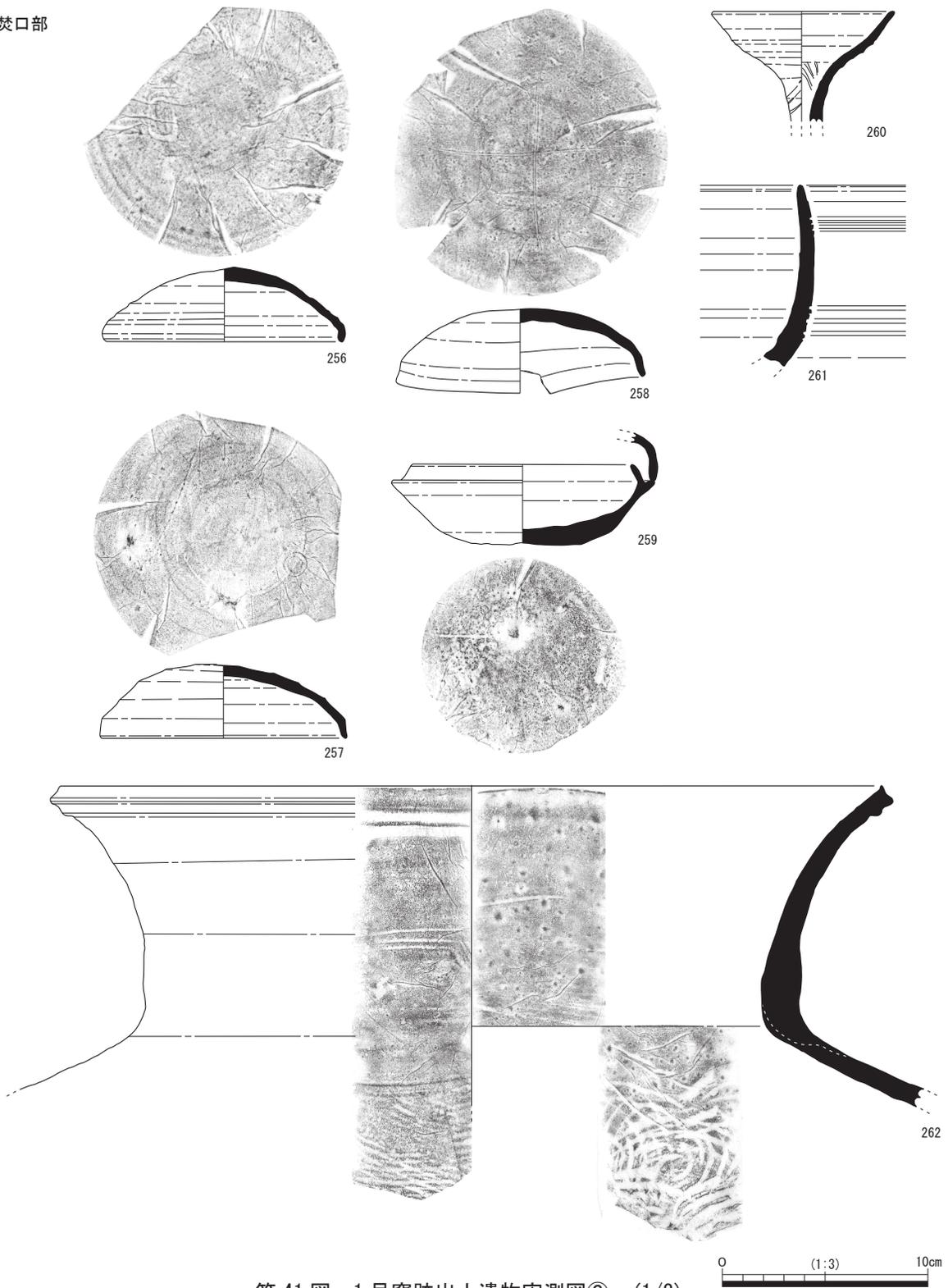
須恵器 (298～306) 298・299は杯H蓋で、両者とも天井部は丸みを帯びる。天井部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有する。300～303は杯H身で、いずれも底部は平底気味である。301は器高が低く、杯G蓋の可能性もある。底部は301がヘラ切り後手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。全ての外面にヘラ記号を有する。304は高杯杯部である。杯部下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。305は高杯脚部で、シボリ痕が顕著である。内外面は回転ナデで、脚部内面にヘラ記号を有する。306は長頸壺であろう。胴部は扁球形で、肩部が張る。外面の調整は降灰のため不明であり、内面は回転ナデである。

瓦 (307・308) 307の内外面は摩滅するが、凹面は模骨痕・布目痕・糸切り痕・模骨の紐の痕跡が残り、凸面はタタキ後ナデであろう。焼成は軟質で黄褐色から黄橙色を呈する。308は全体的に薄いつくりで、厚さ0.6～1.2cmほどである。凹面に模骨痕・布目痕が残り、凸面はタタキ後ナデである。焼成は良好で灰色を呈する。凹面には溶着物がある。

【その他 (第46～49図)】

須恵器 (309～328) 309～313は杯H蓋で、309は天井部が平坦で、他は丸みを帯びる。天井部は309がヘラ切り、310～312は回転ヘラケズリ、313は手持ちヘラケズリである。いずれも外面にヘラ記号を有する。314～316は杯H身で、315・316は外面にヘラ記号を有する。底部は314・315がヘラ切り、316は回転ヘラケズリである。317・318は短脚高杯の杯部で、317は外面にヘラ

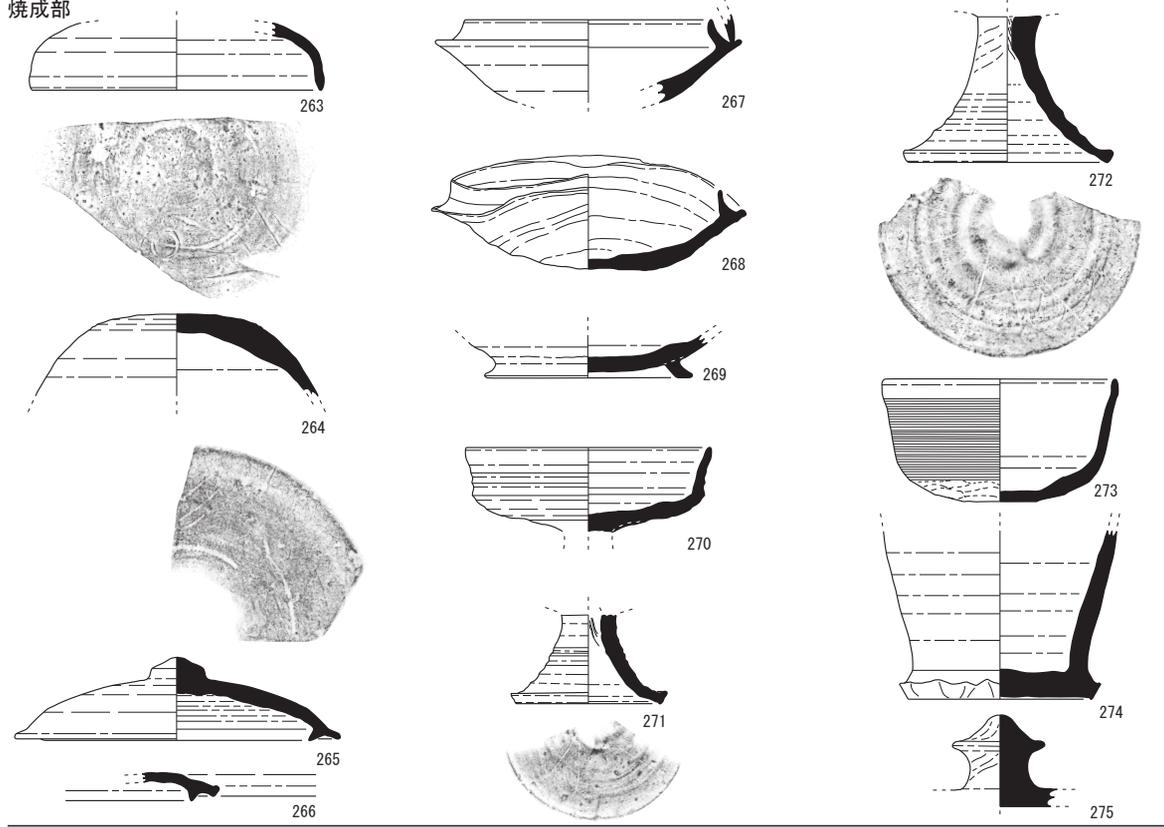
焚口部



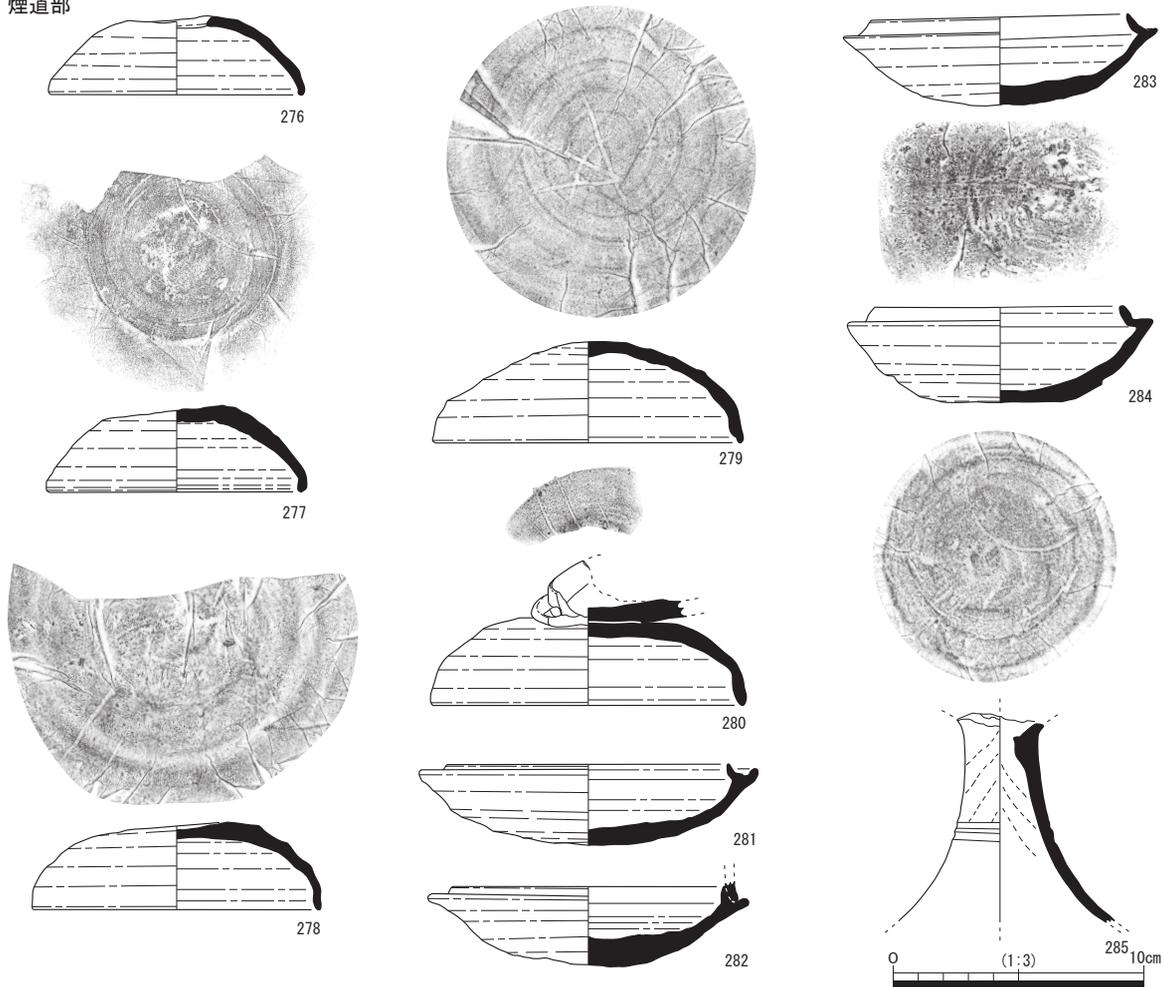
第41図 1号窯跡出土遺物実測図⑥ (1/3)

記号を有する。317は回転ナデで、体部中位に沈線が巡る。318の内外面は回転ナデである。319～321は蓋と身が溶着した資料である。319は天地逆の可能性もある。天井部・底部ともに丸みを帯びる。蓋・身ともに外面にヘラ記号を有し、天井部・底部は回転ヘラケズリである。320は降灰のため調整は不明であるが、蓋の体部に別個体の杯身片が付着する。321は杯H蓋と身のセットで、

焼成部

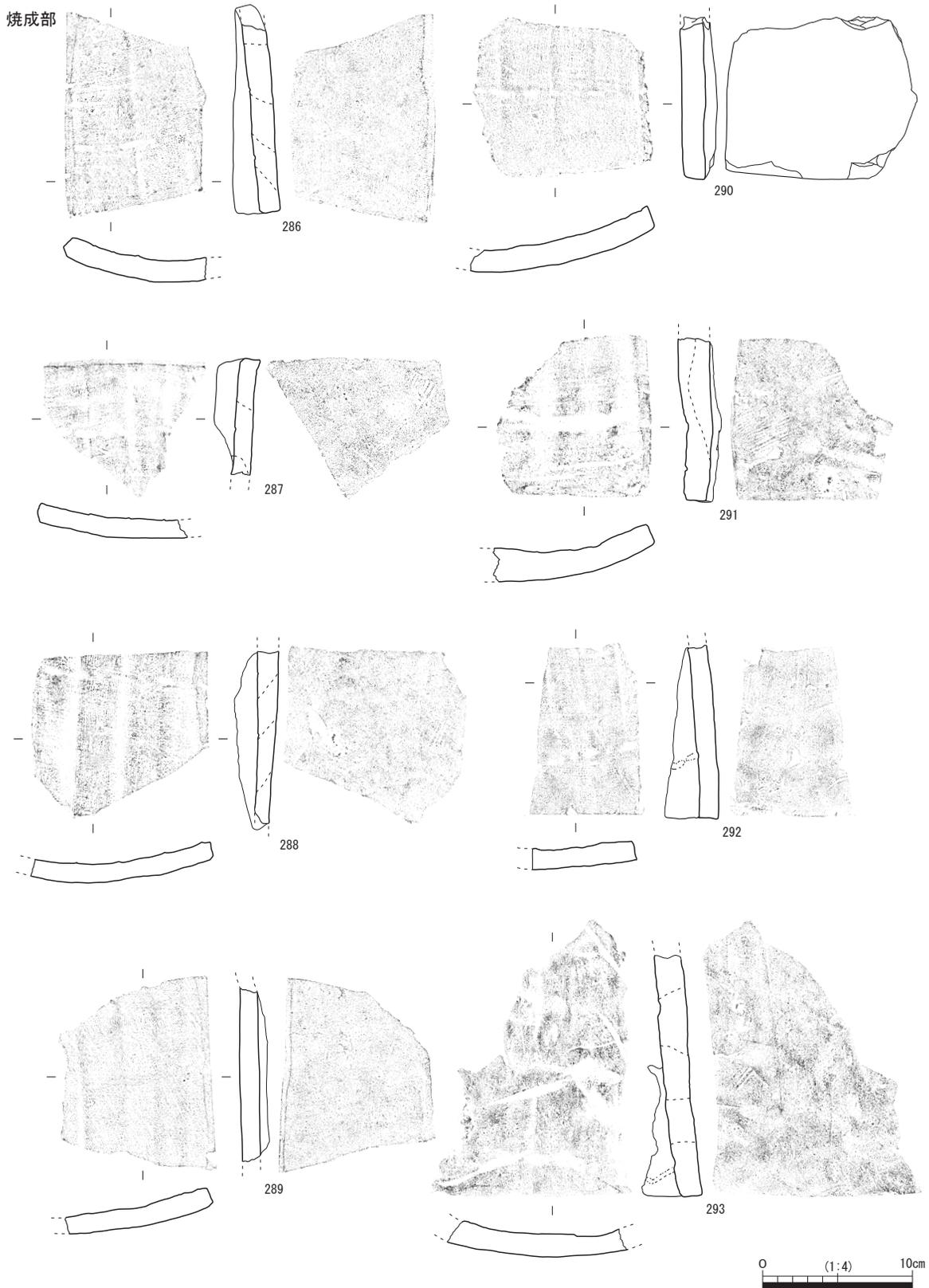


煙道部



第42图 1号窯跡出土遺物実測图⑦ (1/3)

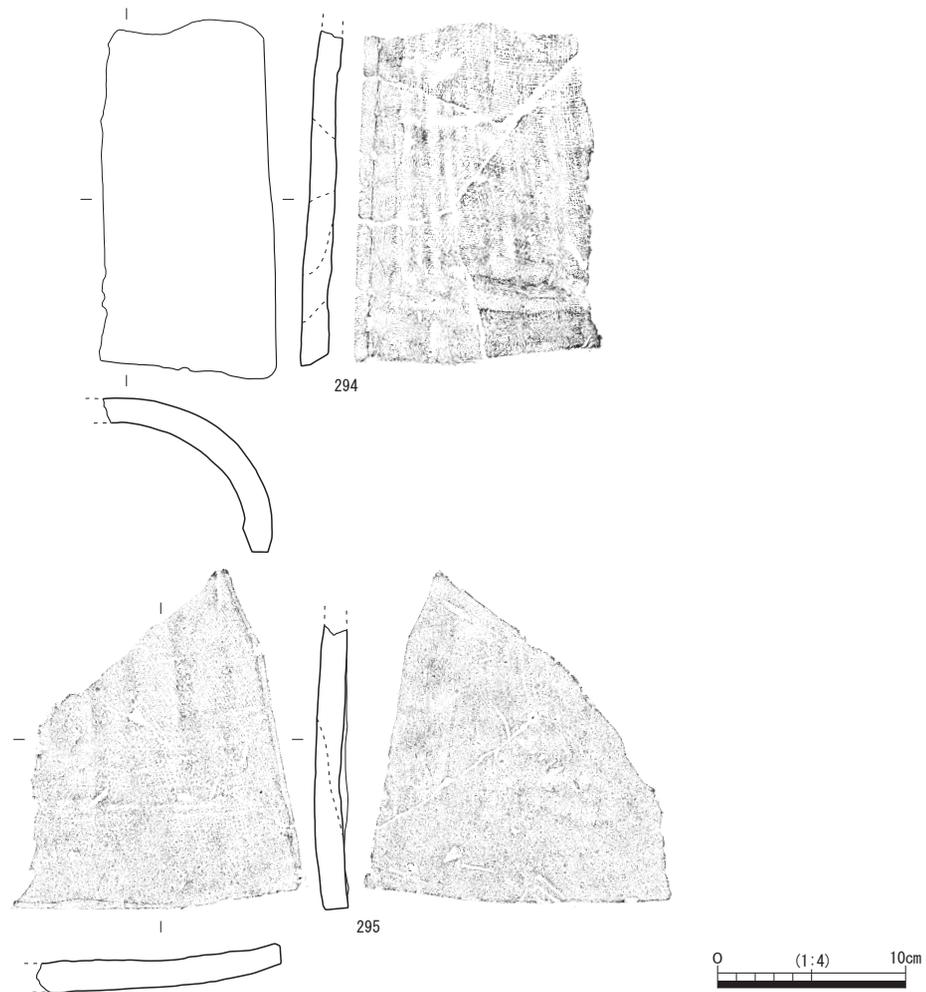
焼成部



第 43 図 1 号窯跡出土遺物実測図⑧ (1/4)

身の体部には別個体の杯H身が付着する。これらは降灰のため調整が不明であるが、蓋の外面にはヘラ記号を有する。322は有蓋高杯である。杯部下半はヘラケズリを施す。323・324は高杯の脚部片で、323は外面にカキメ、内面にヘラ記号を有する。324の内外面は回転ナデである。325は小型

焼成部



第44図 1号窯跡出土遺物実測図⑨ (1/4)

の壺で、口縁部は短く外反する。内外面は回転ナデで、底部は回転ヘラケズリである。326は甕の口頸部片で、頸部は沈線により上下2段に区画する。外面にカキメを施した後、下段に斜線文、上段に山形の線刻を施す。327・328は甕の体部片で焼成前穿孔を施す。いずれも外面に擬格子タタキ、内面には同心円当具痕が残る。

瓦 (329～349) いずれも平瓦である。破片であるが、残存状況が良好な329は残存幅11.2cm、残存長19.8cmである。厚さは平均で1.5cm前後、厚いものは2.1cm、薄いものは0.6cmである。側縁部と端部は面取りを施し、2つの単位があるものや、凹面もしくは凸面まで及ぶものもある。焼成は硬質で灰色を呈するものもあるが、軟質で黄灰色を呈するものが多い。胎土は1～3mmほどの白色砂粒を含む。いずれも凹面に模骨痕・布目痕が残り、模骨の紐の痕跡があるもの(329・331・337・340・342・345)や糸切り痕があるもの(332・333・341・344・345・347)がある。330・331・332・333・334・336・337・341・344・345・346・347・349は凸面に平行タタキが残り、タタキ後ナデを施す。330は凹面に甕の体部片が付着しており、置き台として使用した可能性がある。